

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18250

研究課題名(和文)大阪漢学と近代企業家に関する研究 泊園書院と重建懐徳堂を中心として

研究課題名(英文)A Study of Confucianism and Modern Entrepreneurs in Osaka, Focusing on Hakuen Shoin and Choken Kaitokudo

研究代表者

横山 俊一郎(YOKOYAMA, Shunichiro)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：60759827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東アジアの伝統教養である漢学とそれを学んだ企業家との関係について、大阪という都市に注目しながら考察している。明治期の大阪に存在した漢学塾・泊園書院は、企業勃興期と呼ばれる時期に多くの企業家を輩出した。彼らは中央と地方の双方において鉄道業・銀行業・紡績業などの企業を設立したり経営したりしたが、地域経済を発展させようとする彼らの意識の背後には泊園書院で学んだ漢学の素養があったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの漢学と企業家との関係に関する研究は、日本資本主義の父と呼ばれた渋沢栄一が取り上げられ、とりわけ彼の道徳経済合一説が注目されてきた。しかし、本研究で取り上げる泊園書院出身の企業家は、まず人数が多く、その活動地も中央と地方に及び、彼らは渋沢の教説が世に出る以前に活動している。これらの条件により、企業勃興という経済事象を思想史的にアプローチすることが可能となり、従来にない試みができたとと思われる。

研究成果の概要(英文)：This study considers the relationship between Confucianism, which was a traditional culture of East Asia, and the entrepreneurs who learned it, focusing on the city of Osaka. Hakuen Shoin, a Confucian school that existed in Osaka during the Meiji era, produced many entrepreneurs during the period called the boom of enterprise. They founded and managed railway, banking, spinning and other companies in the both of central and rural areas. I think there was the Confucianism learned at Hakuen Shoin behind their consciousness to develop the regional economy.

研究分野：日本漢学

キーワード：泊園書院 日本漢学 工業化 企業家 名望家 藤澤南岳 褒章名鑑 地域社会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近代日本の企業勃興は中央と地方の双方で生じた広範な経済事象であった。この企業勃興を先導した「企業家」については、彼らの名望家的な特性や経営ナショナリズムが果たした役割の重要性が指摘されている。

他方、大阪の漢学塾・泊園書院の門人名簿『登門録』および『登門録名簿』をみると、紡績業・製紙業・鉄道業・銀行業など近代企業の設立ないしは経営に関与した多くの大阪商人および地方地主を見出すことができる。また、『懐徳堂要覧』をみると、懐徳堂記念会の特別会員には、これらの泊園書院出身者を含む多くの「企業家」を確認することができ、さらに重建懐徳堂を運営した初代理事長には泊園書院出身の銀行家・永田仁助が就任している。

加えて、当時の泊園書院の院主・藤澤南岳はみずから創立した儒教振興団体・大成教会において「国益」論を説いていたが、この近世以来の経済概念である「国益」論は、明治以降の経済主体の行動にも一定の影響を与え続けていたと思われる。

このように考えていくと、泊園書院を中心とした当時の大阪漢学と近代の「企業家」との間には何らかの深い関係性が存在しており、これを解明する意義は大きいと考えた。

2. 研究の目的

東アジアの儒教教養人は、中国の士大夫や朝鮮の両班の存在形態を想起すると明らかなように、本来思想家であると同時に実務家であった。本研究では、この東アジアの儒教教養人の伝統を念頭に置きつつ、日本の実務家とりわけ「企業家」にとっての儒教、漢学とは何であったか、について考えたい。

これまでの日本儒教史の研究では、日本の実務家のうち「政策者」については幾らか取り上げられてきたが、近代以降に出現する「企業家」については日本資本主義の父・渋沢栄一を除いてほとんど注目されてこなかったといえる。

そこで本研究では、明治期西日本の企業勃興を先導した泊園書院出身の「企業家」たちに注目し、彼らの思想（意識）および実践（行動）、またその両者の関係性を考察する。具体的には、泊園書院出身の「企業家」たちの院主・藤澤南岳との交流状況、さらに彼ら「企業家」が南岳の実業論のどの部分を受容し、みずからの事業活動やその他の活動に反映させていたのか、について検討する。

そうして明らかになった経営と文化に関わる事実関係を踏まえて、大正期の大阪における重建懐徳堂の設立運動の意義を再検討することで本研究のまとめとしたい。

3. 研究の方法

上記の研究目的の達成を目指して、以下の手順で研究を進めた。

- (1) 山口県における泊園書院出身者の事業活動
- (2) 岡山県における泊園書院出身者の事業活動
- (3) 褒章名鑑にみる泊園書院関係者の諸活動
- (4) 住友家の泊園書院とのネットワーク
- (5) 杉村家の泊園書院とのネットワーク

(1)と(2)は泊園書院出身の「企業家」のうち地方地主を、(4)と(5)は泊園書院出身の「企業家」のうち大阪商人を取り上げた。また(3)は泊園書院の関係者（出身者本人に加えて、出身者の父・子・母、兄・弟・叔父・孫を含む人々）を、さらに彼らの事業活動だけでなく公共・慈善活動を取り上げた。重建懐徳堂の設立運動については、力及ばず取り上げるまでには至らなかった。

4. 研究成果

(1) 山口県における泊園書院出身者の事業活動

本研究では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、山口県宇部地域の名望家、すなわち林仙輔、村田増太郎、紀藤閑之介、加藤亮吉に注目し、彼らの略歴および企業家・渡辺祐策との共同事業を明らかにしつつ、渡辺を含めた彼らの活動に対して思想と制度の両面で影響を与えた彼らの父親の言動に注目した。

彼らは長州藩永代家老福原家の家臣の子弟として文久期もしくは明治初年に生まれた。ただし彼らは先祖代々武士であったわけではない。林家と紀藤家はもともと医者をつとめていたし、加藤家に至っては元商人であった。

林を除く彼らは岩国の東澤瀉塾と大阪の泊園書院の両方で学んだ。その後、村田は東京の和仏法律学校、紀藤は大阪の大学分校予科から転じて京都の第三高等中学校、加藤は大阪の府立中学校をへて東京の帝国大学法科大学にそれぞれ進学した。

彼らは帰郷後、宇部地域の村会議員や村長、市制施行後は市会議員や市長を歴任するなど、地方自治につとめた。林の場合、宇部村初の衆議院議員として国政にも関与している。実業面では、宇部興産創業者の渡辺祐策と数多くの共同事業を手掛けている。その中には、宇部興産の母体となった四社も含まれる。しかし、その事業熱は警察署・郵便局・橋梁・学校の設置にも及んでおり、彼らは営利追求だけを目標とする実業家ではなかったことが窺われる。

こうした彼らの名望家としての活動を支えた組織ないしは制度には、宇部共同義会・一致会・宇部達聡会といったものがあり、その草創期を初代会長や顧問格として率いたのは加藤と紀藤の父親である藤田義輔と紀藤宗介であった。

藤田義輔と紀藤宗介はともに禁門の変と四境戦争を戦い抜いた福原土族である。維新後には、藤田義輔の場合、平民からの漢文学習需要に応じつつ、西洋のことで漢詩で表現するなど、柔軟性ある近世的教養人として福原土族集団の内部で一目置かれ、紀藤宗介の場合、治者の責務として貪欲や快楽を戒める考えを持ちつつ、それと同時に衆心と万物への洞察がなされていた。

以上のように、彼ら泊園書院出身者の活動に対して思想と制度の両面で影響を与えた彼らの父親の言動を見ると、とりわけ治者の責務として自己の貪欲や快楽を戒めつつ、維新後に到来した新たな社会や新たな学問の状況に対応していく様子が窺われる。こうした状況対応は、西洋由来の文明観を背景として儒教古典を再解釈した結果の産物であったと考えられる。

(2)岡山県における泊園書院出身者の事業活動

本研究では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、岡山県の実業家、星島謹一郎と中野寿吉に注目し、彼らの経歴を通して事業活動を明らかにしつつ、それを支える意識とは如何なるものであったか、という問題に接近することを試みた。

彼らはともに富農の子弟として幕末に生まれた。また彼らは犬飼松窓や西薇山といった地元の高名な漢学者に師事したのち、明治10年代にかけて泊園書院で学んでいる。

泊園書院における両者の就学態度には明らかな相違を確認することができる。当時の成績表から両者の就学期間を見ると、星島は1年間の在籍であったが最後の2カ月は「不勤」の印が押されており、実質的には10カ月の就学であった。それに対して中野は約4年半も在籍しているが、星島のような就学態度のムラは見られない。

実業家としての活躍は、星島が明治30年(1897)に星島銀行を創立して頭取となり、中野が明治27年(1894)に実業界入りするなど、ともに日清戦争前後に本格化した。彼らはその後、地元の銀行業・鉄道業・紡績業の企業運営に積極的に関与している。また星島は港湾建設や干拓事業、中野は学校設立や紛争調停にも関与するなど、注力分野はそれぞれ異なるものの、ともに地域の公共的活動に情熱を傾けている。また星島は国政進出、中野は政党支援というように、ともに政治分野でも積極的な活動がなされている。

では、上記の政治・経済分野にわたる事業活動を支えた彼らの意識とは如何なるものであったのだろうか。まず星島の経世意識を見ると、彼が関心を持った言説には一貫して「舜田」「旻天」「聖人」「孝悌忠信」「礼儀廉恥」「器械窮理」「開物成務」などの儒学的言語が散りばめられていたことがわかる。次に中野の経世意識を見ると、彼は学問と事業を一致させようとする意識の中で、地域における事業活動を展開していたが、その活動はやがて開谷覺とその経営者である西毅一との関係を起点として、日中という国家間の問題にまで広がるものとなった。

次に、星島・中野・南岳の三者が共有した意識とは如何なるものであったか。これについては古代中国の聖賢の政治的手腕を高く評価し、その生きざまをみずから重ね合わせる意識、社員に論語講義を施し詐偽抑制のための廉恥を説くなど、実際の効果を重視する意識、同志社や適塾など洋学系統の知人からの刺激を受けて、より調和的な漢学を志向する意識、の三点が挙げられる。

(3)褒章名鑑にみる泊園書院関係者の諸活動

本研究では、褒章名鑑に表れた泊園書院関係者(出身者本人に加えて、出身者の父・子・母・兄・弟・叔父・孫を含む人々)の諸活動を考察した。

まず緑綬褒章の受章者(計10件)から見ていこう。彼らはおもに大阪など都市で活動し「実業家」として表彰されたが、門人本人と門人の父が半数ずつを占めており、その受章の大半は明治・大正期であった。輸入品国産化の功績によって受章した人々も多くおり、貿易バランスという課題が彼らの意識に上っていた可能性が高い。しかし最も注目すべきは、彼らの多くが緑綬褒章のみならず紺綬褒章の受章者であったことであり、「実業家」に加えて「篤志家」の性格をも有していた。

次に藍綬褒章の受章者(計9件)についてである。彼らは都市と農村の両方で活動し、あえて言うならば「名望家」として表彰されたといえる。また門人本人による昭和期の受章が多かった。彼らは緑綬褒章の受章者のように蒸気機関や株式会社など西洋由来の文物を導入するタイプは少ないものの、「名望家」としての名声を得るために銀行や鉄道の設立に関与するなど「実業家」として活動した人々も一定数存在する。

最後に紺綬褒章の受章者(計67件)を確認しておく。彼らのほとんどは都市で活動し「篤志家」として表彰されたが、門人本人に次いで門人の子が多く、その受章の大半は昭和期であった。このうち、合計受章数が上位七家にランクする彼らのイエに注目したところ、上から順に大阪の新興商人、大阪と縁ある地方商人、大阪の伝統商人といった三グループに分類することができた。しかし最も注目すべきは、上位七家中四家が緑綬褒章をも受章する「実業家」であったことであ

る。

以上のように、泊園書院関係者のうち緑綬褒章および紺綬褒章の受章者は同一のイエに属する人々であったと考えられる。彼らは「実業家」かつ「篤志家」タイプといえるが、「名望家」の性格がなかったわけではない。両褒章の受章歴のある近藤家や桃谷家が地域で果たした役割はまさに「名望家」としてのそれであった。また藍綬褒章の受章者についても、もっぱら「名望家」タイプであったように見えても、「実業家」の性格を持った者はもちろんのこと、土倉家のような「篤志家」の性格を有する者さえも存在したのである。このように考えていくと、泊園書院に学んだ「実業家」とは、単純な「実業家」ではなく、「名望家」や「篤志家」の性格を兼ね備えた、いわば「社会企業家」であるか、もしくは、「社会企業家」の指導者を親族に持つ人々であったか、あるいは、組織全体として「社会企業家」の機能を果たすイエの一成員であったといえる。

(4)住友家の泊園書院とのネットワーク

本研究では、漢学と実業界との関係性を解明するに当たり、近世近代の大阪経済界の巨頭・住友家に注目し、同家と泊園書院との関わりを考察した。考察に当たって取り上げた資料は、住友家の分家の当主・住友南汀の著作『南汀遺稿』である。南汀は幕末期の大坂で松江藩と篠山藩の用達をつとめ、維新期の廃藩置県によって没落するに至ったが、その後住友本家に登用・支援されたため、みずからの隠居所をこしらえるなど優雅な晩年を過ごすことができた人物である。この南汀の三周忌に当たって異母弟の川久保土龍が刊行したものが同書である。

まず南汀の人物像であるが、小伝によると、南汀は住友本家の次子として生まれた父友善の文化的素養を引き継ぎ、青年期になって東咳に儒学を学ぶこととなる。また南汀は呉北渚に書法を学んでいるが、この北渚という人物は東咳友人の春田横塘に儒学を学んでいる。また南汀は南岳友人の日柳三舟を日頃敬服していたという。南汀は泊園人脈につらなる人々との交流を通してその素養を高めていたのである。

次に南汀の人的および知的交流の実態である。序文・題詩・跋文によると、南汀はその作者である藤澤南岳・緒方南湫・日柳三舟と親密な関係にあったと推測される。なお、南湫と三舟はその著作や墓誌銘、家族構成から藤澤家との親密な関係が確認できるなど、彼らも泊園人脈につらなる人々であった。まず南岳との関係については、南汀は『近古史談講義』の著者である田谷九橋とともに南岳に学び、とくに詩文の教えを求めている。南岳の人物評からは、南汀が幼少期の不幸をきっかけとして詩文にのめり込んだ様子が窺える。次に南湫との関係であるが、両者の交際ぶりは直接には窺えない。ただ、その描写に注目すると、南湫から見た南汀像として「世俗から超越した詩人・南汀」というものが見出せる。最後に三舟との関係については、南岳の序文によると、三舟は南汀の才能を見出し、南汀に詩を教えた人物として描かれていたが、当人の跋文には、南汀の異母弟・土龍についての記述が多かった。それによると、南汀の遺稿は土龍の働きによって初めて刊行されるに至ったが、その背景には土龍と三舟が共有する詩文に対する情熱があったことがわかる。

遺稿本文に見る交友関係も見ておこう。ここでも南汀の泊園人脈との強い親近性が窺える。なぜなら、遺稿本文に登場した田結莊千里、日柳三舟、山本父子（竹溪・梅崖）は、共通して東咳と師弟関係ないし連携関係を結び、かつ、その墓誌銘が南岳の撰文による人々だからである。これに対し、南汀の住友人脈を見ると、広瀬幸平（初代住友総理人）・伊庭貞剛（二代住友総理事）など近代の住友家の発展を支えた雇用経営者が見られるが、彼らも泊園人脈に準ずるほどの漢学の素養を持つ人々であった。

(5)杉村家の泊園書院とのネットワーク

本研究では、大阪産業近代化の推進者である五代友厚に協力した杉村家に焦点を当て、その事業活動、泊園書院とのかかわり、さらに二代目杉村正太郎のパーソナリティーなどを検討した。

まず、考察の中心にあった杉村家についてであるが、同家が企業勃興期の大阪で果たした役割は非常に大きいものがあった。なぜなら、五代との事業における資本や役職を見れば、同家が率先して五代に協力している様子を窺うことができ、また、その設立した学校や会社の後継には現在の大阪・関西経済に影響力のある大阪市立大学や住友金属工業（現日本製鉄）が含まれるからである。そうした初代杉村の遺産を受け継ぐ二代目杉村は泊園門人であったが、彼を引き立てた外山修造も泊園門人に長男の家庭教師を依頼するなど、書院を支持する実業家であった。初代杉村が息子たち全員（正太郎・徳次郎・永三郎・猿之助）を書院に入門させている事実をも鑑みれば、外山や初代杉村など大阪の産業近代化を牽引した第一世代は当時の漢学を高く評価していたのかもしれない。

そうした第一世代の影響下にあって書院に入門した二代目杉村であるが、その弟たちと同じく成績は芳しくなかった。それは同時期の入門者である伊藤忠兵衛や鴻池又吉にも言えることである。しかし、このことは彼らに課された家業と学問との両立を考えると納得できることだ

う。また杉村家については、退塾後も院主の還暦祝賀会・古稀寿筵会・贈叙位祝賀会に参加するなど、積極的に書院との接点を持つとした。この種の実業家が杉村家だけに限らなかったことは、贈叙位祝賀会において福本元之助や新田長三らが来賓対応係をこなしている事実から理解することができる。このほか、杉村家における書院との接点は同窓会誌上で多く見られ、しかもそれが双方向の性質を持ち、かつ、昭和期まで継続した事実を確認することができた。

では、書院に通った実業家とは、そうではない実業家と比べて何が違うのか、泊園門人には特有のエートスがあったのだろうか。そこで考察では、二代目杉村に焦点を当て、彼の評判記と褒章名鑑における記述を見てきたが、彼は自己の利害よりも公衆や国家に重きを置く実業家で、損得勘定に長けたほかの大阪の実業家とは違ったタイプであつたらしい。また二代目杉村はみずからの理想を所論として語るだけでなく、寄付活動などを通してそれを確かに実行していた。

(6) 結論と展望

まず(1)と(2)は泊園書院出身の「企業家」のうち地方地主を考察対象とした。彼らは地元企業の設立・経営に関与するだけでなく、地域利害を調整したり社会インフラを整備したりした。その意味において、彼らは営利活動に従事する「実業家」や「企業家」というよりもむしろ地域社会にコミットする「名望家」というべき人々であった。

この近世後期に起源を持つとされる「名望家」的な行動が明治期の企業勃興に貢献したことはこれまでに指摘されてきたが、その行動を支えたものとして漢学的素養があったと考えられる。なぜなら(1)と(2)の考察で登場した人々は漢学の伝統である経学の作業を踏まえてみずからの治者としてのあり方や西洋文明との調和を模索していたからである。

また(3)では、地方の農村のみならず、中央都市・大阪においても、泊園書院は「実業家」「名望家」「篤志家」の性格を併せ持つ人々を多数輩出している様子を確認することができた。このことは、先ほどの「名望家」的な行動の基盤としての漢学的素養という見方を補強する事実といえるだろう。(5)はその具体例として元両替商の杉村家を取り上げたが、泊園門人の二代目杉村正太郎よりもむしろその父で五代友厚の協力者であった初代杉村正太郎の方が漢学に親しみを覚えていたようにも見える。漢学と企業家との親密な関係は、企業勃興期の初期段階においてすでに存在していたのではないだろうか。

なお(6)では、企業勃興期に即応できずにむしろ没落していった住友家の分家の当主・住友南汀の泊園書院との関係を見てきた。ここでの漢学的素養は文人ないしは数寄者の活動を支えるものであって、先述した「名望家」的な行動を支えたそれではなかった。ただ、没落しかけた住友本家の経営を再建し財閥へと導いた住友の雇用経営者たちが、南汀とともに文人ネットワークを形成していた事実から見て、この詩文に重点を置いた漢学的素養も当時の「企業家」に支持されたものの一つであったのだろう。

いずれにしても、「企業家」と漢学の親密な関係は、渋沢栄一が道徳経済合一説を語るよりずっと以前の段階から存在したと同時に、そのような経営と文化のあり方が、近代日本の中央と地方の双方に見られたことは間違いないだろう。

本研究では、泊園書院出身の「企業家」の思想(意識)と実践(行動)を考察してきたが、いくぶん後者の方に注目しすぎてしまった。そのため、彼らの実践(行動)と院主・藤沢南岳の思想(意識)との関係や、最後のまとめとして取り上げる予定であった重建懐徳堂の設立運動の分析が不十分なままとなっている。これらについては今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 横山俊一郎	4. 巻 第52輯
2. 論文標題 近代岡山における泊園書院出身者の事業活動の一考察 実業家星島謹一郎・中野寿吉を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『関西大学東西学術研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 249-266
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山俊一郎	4. 巻 第51輯
2. 論文標題 山口県宇部地域における泊園書院出身者の事業活動の一考察 渡辺祐策を支えた名望家を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『関西大学東西学術研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 351-371
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山俊一郎	4. 巻 第58号
2. 論文標題 近代の泊園書院と社会企業家 褒章名鑑にみる書院関係者の諸活動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『泊園』	6. 最初と最後の頁 69-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山俊一郎	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 住友家の人々と泊園書院 『南汀遺稿』の考察を中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『関西大学東西学術研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 自著紹介 『泊園書院の明治維新 政策者と企業家たち 』
3. 学会等名 渋沢栄一記念財団助成事業 『近代東アジアにおける実業家の果たした役割に関する総合的研究』第1回研究会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 備前・備中で活躍した泊園門人たち その企業家活動と教育活動
3. 学会等名 第2回漢学者記念館会議（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 漢学・名望・近代 泊園書院出身の実業家の足跡から見えるもの
3. 学会等名 渋沢栄一記念財団助成事業 『近代東アジアにおける実業家の果たした役割に関する総合的研究』第2回研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 石濱純太郎と十五年戦争 戦時下の泊園学の一側面
3. 学会等名 渋沢栄一記念財団助成事業 『近代東アジアにおける実業家の果たした役割に関する総合的研究』第3回研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 近代日本の漢学塾と社会企業家 褒章名鑑にみる泊園書院関係者の諸活動
3. 学会等名 渋沢栄一記念財団助成事業『近代東アジアにおける実業家の果たした役割に関する総合的研究』第4回研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 泊園門人研究の現状と今後のデジタルリソースの活用について
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所第19回研究例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 各種帳簿類から読み取る泊園門人データについて
3. 学会等名 KU-ORCAS第3回研究集会ユニット2
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山寺美紀子, 長谷部剛, 矢野野隆男, 横山俊一郎, 中谷伸生, 町泉寿郎, 吾妻重二, 有馬卓也	4. 発行年 2017年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所	5. 総ページ数 235 (87-115)
3. 書名 泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈 関西大学創立130周年記念泊園書院シンポジウム論文集	

1. 著者名 横山俊一郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 310
3. 書名 泊園書院の明治維新 政策者と企業家たち	

1. 著者名 吾妻重二, 石濱俊造, 高田時雄, キリル・ソーニン, 劉進宝, 池尻陽子, 中見立夫, 生田美智子, 玄幸子, 横山俊一郎, 湯浅邦弘, 堤一昭, 陶徳民, 中谷伸生, 増田周子, 大原良通, 太田剛, 石濱裕美子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所	5. 総ページ数 512 (257-281)
3. 書名 東西学術研究と文化交渉 石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集	

1. 著者名 中村聡, 藍弘岳, 川邊雄大, 野村純代, 吉田博嗣, 桐原建真, 平崎真右, 佐藤保, 江藤茂博, 牧角悦子, 町泉寿郎, 鄧捷, 横山俊一郎, 松本和明, 李慶, 新藤透, 山田敦, 于臣	4. 発行年 2020年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 335 (209-227)
3. 書名 漢学と東アジア (講座 近代日本と漢学 第8巻)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap https://researchmap.jp/0403
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----